

九州派顛末記

針生一郎

1950年代後半から60年代前半にかけて、日本各地に前衛的な美術グループが族生した時期がある。もっとも、瀧口修造を中心とする東京の(実験工房)、瑛九の提唱で宮崎、大阪、東京の美術家加わった(デモクラート美術家協会)、古屋治良が関西の新鋭を結集した(具体美術協会)、土岡秀太郎が福井で組織した(北美文化協会)などは、戦前からの先覚者の指導で50年代前半に発足している。だが50年代後半以降はそういうリーダーなしに、既成の公称団体展に不満をいだく若い美術家たちが、さしあたり読売アンデパンダン展を却坵地としながら、相互研鑽とより尖鋭な発表を求めてグループを結成したのだ。1956年末の(世界・今日の美術展)で、アンフォルメル(非定形)の動向がはじめて日本に紹介され、そこに潜在したダダ的な「反芸術」の思想が、のちにパフォーマンスとよばれる直接行為すらよびおこしたことも、その背景としてみのがせない。

わたしの記憶にのこる当時のめぼしいグループには、宮城の〈エスプリ・ヌーヴォ〉、茨城の(ROZO)、東京の〈黄色人種〉(制作者懇談会)(実在者)(新表現派)(ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ)(ハイ・レッド・センター)(時間派)、静岡の〈幻触〉、名古屋の〈アルファ芸術陣〉(ゼロ次元)、岐阜の(VAVA)、神戸の〈位〉、岡山の〈岡山 青年美術家集団〉、高知の〈土佐派〉、大分の(新世紀群)などがある。だが、そのなかでも福岡の〈九州派〉ほど、深い地層から熱いマグマが噴出するようなエネルギーを感じさせるグループはなかった。そこにはいくつかの原因があるが、第一に、もともと中央志向や海外志向ではなく、あくまで九州人の特徴を強調しながら東京になぐりこみ をかける姿勢、第二に、モダニズムを拒否して、芸術の変革と社会の変革を統一しようとする空気、第三に、だれ が代表でも親分でもなく、多士済々でくせものぞろいのメンバーが、たえず星雲状にひしめきあったこと、などがあげられるだろう。

九州派の結成までの経過をわたしは直接には知らないが、いくつかの資料や証言によると桜井孝身とオチ・オサムの出会が発端だったようだ。西日本新聞社の校閲部において、組合活動もしながら、詩をつくり絵を描いていた桜井は、1955年二科展に初入選する。だが、同年の二科展では、岡本太郎がみずから会長をつとめる〈アート・クラブ〉から、藤沢典明、多賀谷伊徳、吉仲太造、早川昌などのメンバーを導入して第九室にならべ、タローの「大型トレード」などとさわがれたもので、そのなかに20歳前後のオチ・オサムもいた。福岡の二科会員・入選者の会合でオチと知りあった桜井は、自分よりずっと年下のオチが自分の傾倒する岡本太郎に注目されて、〈アート・クラブ〉や二科展に加えられたことにショックをうけ、早熟なオチが「どんな材料でも作品になる」とダダ的な発見を語るのに、さらにおどろいたらしい。だが、「こいつただものじゃない」と思うと、「田舎者」とか「鈍才」と

か自称しながら、とことん喰らいつくのが桜井の流儀で、その夜、車中の人がふりむくほど大声でまくしたてながら、オチを二日市町の自宅につれて帰り、たちまちグループをつくる相結をしたという。西日本新聞社編集部にはいた詩人の侵野衛も、「グループは必要ばいと助言してくれた。やはり二科展常連で二日市に帰ってきた黒木耀治と久留米の西鉄にいた石橋泰幸を仲間に加え、だれいうとなく福岡県庁の塀を使う街頭展を構想した。思いかけなく県当局の許可が出て、1956年1月、俣野10人の詩と4人の絵をならべた（ベルソナ展）がひらかれると、「青空展覧会にて各新聞に写真や記事がのり、以後グループに加わりたい美術家が続出したらしい。

岩田屋の楽焼コーナーで、皿に似顔絵を描いて生活していた菊畑茂久馬は56年の独立展に初出品で入選し、わたしはたまたま美術雑誌でその作品を論評している。その菊畑が57年、野外で煮たてたアスファルトをベニヤ板にぶちまけた上、石膏や泥絵具を投げつけ、松葉箒でひっかいた作品を、読売アンデバンダン展や二科展に出品していた桜井、オチ、石橋らと知りあって、二日市の桜井の家に独立展入選作をもっていってみせると、車座になって焼酎をがぶ飲みしていた数人がゲラゲラ笑いだしたという。誠実真摯とみえる絵が、いかに自分を甘やかして欺瞞的かを説得され、菊畑はたちまち仲間に加わるが、その思想的動播のせいか57年の独立展には落選した。そんな風にして、二科展の常連寺田健一郎、独立展に出品し、西日本美術展で西日本新聞社賞をとった木下新、自由美術展に入選した磨墨静量、石橋（現・田部）光子、西日本洋画新人秀作展で金賞の山内重太郎、県展で朝日新聞社賞の尾花成春、中学教師の小幡英資なども加わった。

「九州派」と命名したのは、戦後文学や芸術思潮にもくわしい最年長の俣野衛で、彼は見よう見まねで絵も描いたが、裏方に徹して57年9月に第1号が出た機関誌『九州派』の編集をうけもった。もっとも、旧制五高出で、敗戦直後トシコ・アキヨシの婚約者だったという磨墨は、（グループQ）を提唱し、同年8月岩田屋で〈グループQ18人展〉がひらかれ、11月県庁の塀での第2回街頭展でも、出品者全員が麻袋に絵具で顔を描き、胸にQの字を大書し、石油罐を腰にぶらさげて行進している。同じころ、唐墨、斎藤秀三郎、皆島万作、谷口利夫、働正、川上省三らによって、〈グループ西日本〉が結成され、これは菊畑によれば九州派への批判派だというのが、当時すでにあるいはやがて九州派に加わった人びとばかりである。離合集散たえまないメンバーの流動性は、当初からこのグループにつきまっていたのだろう。